

小学校だより

Vol.135



「仮説」と「試行錯誤」と「言語化」

校長 森和久

「ここを入れ替えると、うまくいくんじゃないかな。」「ちよつとやってみようか。」「ちがうなあ。後ろに動いちゃった。」「それじゃあ、こうするといんじゃない。」「

先日、今話題のプログラミング教育の研究を先進的にしているらっしゃる先生を小学校にお招きし、三年生を対象に授業をしていただきました。教育用のレゴブロックでロボットを組み立てて、そのロボットを動かすプログラムをタブレット型パソコンで作っていくのですが、その過程で冒頭のような会話をしながら考える子どもたちの姿に大変感銘を受けました。

子どもたちは、望むようにロボットを動かすには、どのようなプログラムにすればよいのか考え、子どもたちの「仮説」を立て、やってみてうまくいかない場合は修正するということを繰り返す、即ち「試行錯誤」をしています。そして、それを友達に伝えるために「仮説」や試行してみようということを言葉に表しています（「言語化」）。

私はこの「仮説」の設定、「試行

錯誤」、「言語化」ということが、教育においてとても大切だと考えます。これから子どもたちが直面するであろう様々な課題に対して、それをどうしたら解決できるだろうかということを、まず自分の頭で考えようとすることができなければなりません。人が言うからそれが正解の方法だろうと判断するのはなく、様々な情報を取捨選択しながら、自分で考えて判断できなければなりません。判断してやってみたら失敗だったということはいくらでもあります。そうしたときにそこで挫折してしまうようでは困ります。だから次の方法を考える「試行錯誤」が必要で、「試行錯誤」を楽しむような心の持ちようでありたいものです。

また、これらのことを、考え、実行していく過程に「言語化」は不可欠です。自分のこれからのこととの検討や自分のしたことに対する振り返りを、「なんとなく」「感覚的に」していたのでは、自分の中に成果として蓄積できません。必ずしも言葉として発しなくてもよいと思いますが、少なくとも

も頭の中で明確な言葉で文章化するということが、さらなる向上につながっていくと考えます。

今回の子どもたちの様子を見て、私たちは、ともすると子どもたちが「仮説」を立て、「試行錯誤」する機会を、「転ばぬ先の杖」で奪っているのではないかとこのことを改めて考えさせられました。

「だめだめ。そうじゃなくて、こうでしょ。」という言葉を、ぐつとこらえて、「どうしてそうしようと思ったの?」「そうするとどうなると思う?」というような問いかけをして、「言語化」を促すような、ゆとりを持った姿勢が学校においても、家庭においても大切なのではないのでしょうか。



〈ロボットを動かす様子〉

特集 書き初めコンクールはいつから? P2

学期のトピックス P3 / 委員会・部活動報告 P4 / 学期の記事 P5

学年トピックス P6~P17

PTA P18、P19 / 職員の諸活動・学園トピックス・編集後記 P20

CONTENTS